

研究主題

つながりのなかで 暮らしをつくる子ども

～ 子どもとくらす 教師の目と問い ～

1 研究主題

(1) 主題について

本校では、「つながりのなかで、暮らしをつくる子ども」を学校教育目標だけでなく研究主題における目指す子どもの姿として掲げ、研究を教育活動の中核に据えている。学校教育目標を具現化するための方策として、研究を通して、子どもが「人・もの・こと」とつながりながら、暮らしのなかで見出している意味や価値を感受できるような教師の目と問いを磨いていきたい。

研究主題に掲げた「つながり」や「暮らしをつくる」は次のように考える。「つながり」とは、単に一緒に活動したり、触れたりすることをさすのではなく、子どもが「人・もの・こと」に思いを寄せてかかわり、その結果を享受することではじめて「つながる」になるととらえている。一方的なかかわり方で終始するのではなく、子どもがかかわることで生じた結果に対して、責任をもって受けとめることを大事にしていきたいと考える。

また、「暮らしをつくる」ということは、ただ単に子どもがやりたいことを自分で決めて実行していくということではない。日々の暮らしの中で「『人・もの・こと』とつながる」ことを契機として、それらに対する意味や価値を自覚したり、更新したりしていくことになり、また、つながり方そのものが更新していくことであると考え。

こうしたことがスパイラルに行われていくことで、子どもは、私たちが考える「つながりのなかで 暮らしをつくる子ども」に近づいていくと考えている。

(2) 昨年度の実践より（6年生の子どもの学びから）

・全員で出場したい

A児の成長をふり返る上で、必ず思い出すのが、5年生のときの自然体験学習である。自然の家での3日目の朝、多くの子どもが寝坊したことで活動が大幅に遅れていたときのことである。このときA児の班は時間の遅れを気にしながら早めに朝食を終えていた。すると、A児が炊飯棟に食後の歯磨きに来た。炊飯棟では、多くの子どもたちが片づけや大掃除をしていた。最後の炊飯活動ということもあり、自分の班だけでなく、活動が遅れ気味になっている班の分もみんな片付けをしていた。しかし、その隣で歯磨きをしていたA児は、「集合場所に急がなくちゃ。」と言いながら、テントに戻ろうとした。このときのことは、これまでA児と何度も話す機会があった。それはA児にとって原点ともいえるべき出来事だからである。今では、「もう、あんなことしませんよ。」と笑いながら話しているA児が、この2年間において何かが契機となり、自分のことだけでなく周りのことを考えるようになってきた。

春、クラスの子どもたちは6年生となり、委員会やクルーズ班の立ち上げ、児童会総会、運動会、陸上記録会と総力戦のような雰囲気、クラス全員で一つ一つ乗りきっていった。そんな子どもたちが掲げた今年の学級のスローガンは、「一人一人が思いをもって行動する」である。38人もいるこのクラスは、自然体験学習時のA児のように、何か違うことをしていたり、何も考えずに誰かの後をついていったりする子どもが数人いたとしても、学年全体としては、なんとかこなしてしまうようなところがあつた。しかし、「6年生では、これまでのような感じでは乗りきれない、全員が思いをもつことは当たり前、それを行動に移すところまでを掲げる必要がある。」と、これまでの雰囲気をよしとせず、「全員で」というところを強く意識した目指す姿を子どもたちは掲げた。

夏になり、市の水泳記録会の練習が始まった。学年39人、自分が出場したい種目を選んでいては、全員で出場することが難しいことは、子どもたちの誰もがわかっていた。A児は、水泳が得意ではあるが、100m自由形でしか標準記録を突破していなかった。しかし、自由形しか泳げない友達がいることを知り、自分から200m個人メドレーへ移ることにした。大会を終えた後のふり返りには、「全員で出場するかどうかを話し合ったとき、小学校最後のことだから、ぼくは全員で出たいと思っていました。最初は、ぼくもやりたい種目を選んでいましたが、人数が

偏ってしまいました。最初に目指した種目ではなくなってしまうけれど、全員で出ると決めたので移りました。200mはあまり泳いだことがなかったけれど、他の人もやったことがない種目に挑戦していたから、ぼくも最後までしっかりと泳ぎきろうと思いました。これからも「目指すもの」をしっかりと掲げて、全員で、何でもやっていきます。」と書いた。

・自分が活躍できるところで精一杯

創立記念式が近づいてきた頃、それまで児童代表のあいさつに決まっていた子どもが、記念式直前になって辞退したことがあった。そんな中、A児が手を挙げ、「ぼくでよければやります。」と発言した。その理由を聞いてみると、「自分がやれるのはこれくらい。いちよう音楽会では、自分の出番はないかもしれない。だから、こういうことなら自分を生かせると思った。それに、自分がきらめき学年として、四小にいたということを残したいと思った。」と話した。最近、このときのことを、「あの瞬間まで、やりたいとは思っていなかった。でも、誰かがやらなければならないのであれば、ぼくはやろうと思った。」とふり返っている。このような発言は、A児が自分自身のことを客観的に見る（得意なこと、苦手なこと・・）ことができるようになりはじめていることやクラスの中の自分の立ち位置がどこにあるのかも考えるようになってきたことを表していることと考える。

・自分を表現するという事は、永久にしていかなければならないこと

総合的な学習では、「歌で自分を表現しよう」をテーマに、くらしの中で感じたことや考えたことから歌詞を創り、自分なりの表現方法で発表した。また、「自分を表現する」ことは、総合的な学習に限らず、詩や意見文、劇、絵など、さまざまな教科の活動を通して取り組んできていた。総合で創作した歌は、メロディーライブラリー委員会が主催の「ハモミニコンサート」で発表することになった。クラスの中で、「うそくさくないものにしたい。」ということが合言葉となり、A児も自分と向き合い、「違うなあ。」という言葉を連呼する毎日であった。その頃のふり返りには、「今の自分たちの歌は、思いがないです。声量も全くないしダメです。今の自分たちの「歌」というものは、ただ歌うだけになっています。声が出なくても、思いの量で、「歌」は変わると思います。今、自分は限界の殻を破っていないから、本当は本気になっていないのだと思います。これからは、思いを表現しようと思います。自分がやりたいこと、目指したいことがあるほど、「歌」は変わってくると思うから、もっと熱くなっていこうと思います。」と書いていた。また、年度末の総合のふり返りには、「自分を表現するという事は、「思い」が大事だと考えていて、そこで思ったことが、自分を表現するという事は、永久にやっていくことだと思いました。中、高、大学、大人になっても、自分が伝えたいことを、そのことに合った表現する手段を選んでやらないと、自分というものはなくなってしまうのではないかと思います。」と書いている。

・大事なことは、自分で意味あることにすること

創立記念式では、「自分はいちよう音楽会で活躍できないから。」と話していたA児だったが、いちよう音楽会の実行委員となり、また合奏の指揮者に立候補した。「実行委員だけど、その他の人と差なんてないと考えている。自分が大事にしているのは、みんなで創っていくことを忘れずにやりきることです。」と実行委員となった理由を話した。A児の「差なんてない」という思いは、普段のくらしの姿にも表れていた。さまざまな場面で、みんなに向けて話すことが多くなってきたのである。沈黙した雰囲気を打破するような発言だったり、時間についての声かけであったりときまざまであるが、全体を見ながら自分にできることは何かを考え、常に全力で向かうA児がいた。この頃、クラスの子どもたちから、「先生、A児って変わったよね。以前は、こんな感じじゃなかったよね。」という言葉がよく出てくるようになっていた。A児にもこのことを伝えてみると、「何でも、せっかくやるのだから意味のあるものにしたいと思うし、みんなで決めたことであれば、みんなでやりたいし、係とか関係なく、とにかく何でもやっていこうというも考えている。」と話した。いちよう音楽会で指揮者になったA児は、毎時間、5、6年生全員の前に立ち、各楽器の担当者に指示を出し、疲れるであろうテンポの速い「前前前世」の指揮を力強く何度も繰り返し行うのであった。卒業が近づいている今、自然の家で歯磨きをしていた姿から約2年が経ち、確かなA児の成長を感じている。

2 研究の重点

(1) 「はじめに子どもありき」から学習活動を考える

本校の研究主題について話し合うときに度々出てくる「はじめに子どもありき」については、以下のように考えている。まず教師が目指したいと考える子どもの姿が先にあり、そこに向けて

子どもたちを引っ張りあげるようなことではまずない。また、子どもが要求したことから活動がスタートするということでもない。「この学級では、子どものどのような育ちの芽が多く出はじめているのか」など、目の前の子どもの育ちをしっかりと見て、とらえることからはじまるものとする。そして、その目の前の子どもの育ちから、教師が目標を定め、その目の前の子どもの育ちに相応しい学習材や単元構成を考えていくことが、本校で考える「はじめに子どもありき」の考え方である。この考えは、授業だけでなく、学校行事等、すべての学校生活における活動を創っていくときの根っこにある考え方であるととらえている。

子どもはそれぞれに個性をもっており、周りの世界は、その子どものもっている意味や価値を中心にして構成されていると考える。このことは授業だけではなく、学校行事や児童会活動など、子どもの暮らし全てにおいてあてはまるものである。そして、教師は、どのような場面においても、目の前にいる子どもの育ちをよく見て、子どもが、「人・もの・こと」と責任をもってつながっているのか、どのような意味や価値の更新がなされているのかを洞察すること、そこから子どもの学びを考えて、出るべきか、待つべきかを判断することが大事になるものとする。

1 時間の授業の中であれば、今、この瞬間、瞬間で、考えられる子どもにとっての最適な学びの環境とは何かを考え、整えていくことであり、子どもの洞察と、そこからの判断を臨機応変にしていくことであるとする。また、授業づくりをしていく上では、学習材と子どものどちらについても教師が深く見えていることが必要であるとする。授業づくりをしていく中で、「子どもの育ちの洞察」と「学習材のもつ意味や価値の可能性」から、子どもの目線になってみて「子どもと学習材が出会ったときにどんな育ちにつながっていくか」と考えながら単元の構想を練っていくためである。

本校の子どもたちの姿を見ていると、教師が予測したところではない様々な場面においても、子どもにとっての意味や価値の更新や深まりが起きていることがある。これは、子どもをとりまく環境のなかで、多種多様にももの見方が刺激されているためではないかと考える。例えば、異学年で行う清掃や、全校で創りあげる歌声などは、まさに子どもがくらしのなかで、周りの子どもたちの姿を契機にして、自分のそれに対する意味や価値を更新したり、深めたりしている姿と感ずるところである。このような日々のくらしの中にある子どもの育ちにも目を向けていきたい。

(2) 教師の目と問いを磨く

一つ目は、子どもの育ちに対する問いである。教師が「どうしてそのような言動をする〇〇さんののだろう。」という目の前の子どもを見つめて生まれてくる「問い」を常に意識しながら、その子の「人・もの・こと」に対する意味や価値をわかろうとし続けることに丁寧に取り組んでいきたい。そのために日頃から、子どものちょっとした変化を見逃さないことがまず重要であるとする。ただし、その日・その場面だけで子どもを見ても、その子の「人・もの・こと」に対する意味や価値の更新や深まりを洞察したとは言えない。だから、一つのエピソードからではなく、円の中心を見つけるように、「人・もの・こと」とつながる様々な場面・いくつかの姿からその子を見ることが重要になる。そしてその子が、それらに対してどんな意味や価値をもっていたのか、そこからどのような意味や価値の更新や深まりがあったのかを見つけていくことで、連続した子どもの「育ちの芽」をとらえていきたいとする。

二つ目は、自分自身への問いである。「はじめに子どもありき」の考えのもと、「子どもの洞察」、「学習材の研究」、「単元づくり」と構想を練っていく中で、どれをとっても目の前の子どもと向き合い、何度も自問自答しながら取り組んでいくこととなる。授業では、子どもと一緒にになって、子どもの話に耳を傾け、興味をもって聞く中で、「この子は、一体どんなことを伝えたいのだろうか。」「この発言の背景には、何かこの子なりの意味や価値があるのではないか。」と考える、発言に対して臨機応変に判断することとなる。事後研では、「あの瞬間、自分はその子の思いをこう判断した。」「あのとき待っていたのは、子どもの学びにとって最適だったのか。」と、子どもについて洞察したことを互いに話し合うことで、自分自身と向き合い、子どもを見る目を磨いていきたいとする。そしてここでも、教師の専門性があるからこそ見えてくる子どもの学びの姿があるのではないかと考えている。子どもが発した言葉をただ記録しても意味がなく、その子の内面を見る目で授業を見ていくことが大切になると考える。このようなことをくり返していくことで、くらしの中の子どもの学びを見て、今は見守ったほうがよいか、出た方がよいか

という判断にブレが少なくなっていくのではないかと考える。また、子どものくらしのなかで、教師が教えるべきこと、子どもが獲得していくものについてもしっかりと線引きができるようになっていく必要があると考える。

三つ目は、教育活動に対する問いである。つながりのなかでくらしをつくっていくことから考えると、学校生活のすべてが子どもにとっての学習材といえる。だからこそ活動を計画する際に、これまで取り組んできたからといって安易に踏襲するのではなく、「子どもにとってこの活動の意義はどこにあるだろう。」「何を大事にして、この活動を続けてきたのだろう。」という子どもと教育活動に対する「問い」を常にもっていることを大事にしたいと考える。

3 研究の内容と方法

(1) 自己研鑽を積み、情報や課題の共有や日々の実践について意見交換を行う

教員一人一人が、教員たる知識や技能、子どもを洞察する力を求めて研究と修養に励むようにしていく。例えば、学習材研究とともに授業研究会を自ら行い、事後研では子どもの洞察について意見交換をしたり、学習指導要領はじめ、児童理解にかかわる書籍や情報を求めて学んだり、研究会等に参加して研修成果を報告したりするなどである。

特に大事にしていくことは、授業やスピーチを求めて見合うだけでなく、互いのもつ情報を交換し合ったり、課題や悩みどころを相談し合ったりと日々、子どもについて話していくという研究の日常化である。個々の学びや課題を共有することで教職員自身が多様な見方・考え方に触れることになり、個々の学びがより深まり更新されることにつながると考えるからである。そのために、授業づくりの悩みどころを気軽に相談できる環境や雰囲気作りを行う。その一つとして、スタッフルームの研究用ホワイトボードを有効に活用する。

(2) くらしをより確かなものにするために、朝のスピーチの時間を設定する

朝の会の中の10～15分間を各学級でスピーチの時間としていく。子どもにとって、スピーチをすることは、次のような効果があると考えられるからである。

一つは、話し手にとっての効果である。話すことによって、自分の内面でこれまではっきりと意識していなかったものが、自分の中で整理され明確になっていくということである。

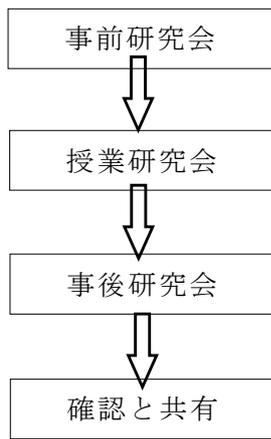
二つ目は、聞き手にとっての効果である。話し手のくらしに思いを寄せながら聞くことで、聞き手がこれまでもっていた「人・もの・こと」に対する意味や価値を更新したり、深めたりする契機になるからである。また、スピーチでは、これからの自分の方向性についても話されることが多い。これは、スピーチをすることで、今の自分の「人・もの・こと」に対する意味や価値を話すだけではなく、これからの自分のくらしにも目が向けられていることを意味している。スピーチで話される内容は、子どもにとってのくらし全般であり、多岐にわたる。そういう意味では、教科の学習という枠の中で話される内容よりも、大きくて広い領域であると言える。スピーチでは、子どもから表出した言葉を糸口として、その子の新たな一面が見えてくる。そのことは聞き手にとっても興味をもてることであり、話し手とのつながりが更新されたり深まったりすることにもなっていく。

教師は、話に心を傾けて楽しみながら聞き、子どもの話に勝手なゴールをもつようなことはせず、その子にとっての価値や意味を常に考えていけるようにしたい。

(3) 自主公開研究会を開催する

四小の代表として授業をするのではなく、普段通りの授業を公開することを大事にする。そして、その授業を参会者の目で、さまざまな面から見てもらい、「教師の目と問い」をともに学び合えるような場と考える。

- ① 期日 平成30年11月16日(金)
- ② 内容
 - ・授業公開：授業(6学級)
 - ・教科など：教科・総合的な学習を含めた全領域(担任が選択)
 - ・主な日程(詳細はこれから検討)



- ・「研究の重点と内容」の視点で、全教員で事前研を行う。検討する過程を通して、授業者に寄り添い、自分自身の子どもの見方や授業づくりの考え方を磨くことにつなげていく。

- ・校外の先生方に参観いただく。

- ・研究テーマに沿って話し合う
「授業を通して見えた子どもの育ちや今後の課題」
「授業づくりや教師の出と待ち」などについて意見をいただき、子どもを洞察する目や問い、授業づくりの考え方を磨く機会にしていく。

- ・今後の見通し等を確認するために、参観者のアンケートをもとに校内研だよりを発行する。（研究主任）

※鼎談の内容は研究集録に記載

（４）夏期研修会（予定）

コメンテーターの先生方をお呼びし、四小の研究について共通理解いただくと共に、1学期の日々の実践をもとに意見交換を行い、今後の研究、自主公開研究会の見通しをもつ機会とする。

（５）冬の学習会

2月 1学級が授業研究を行う。他の学級は奈須先生をはじめ大学の先生方から通覧していただく。

（６）研究のまとめ

各学級担任が、1年間の自己の実践をふり返るとともに、学級の子どもの育ちをまとめることで研究成果として残す。（銀杏の実 第64号）

（７）環境整備

子どもの学びに応じた「場」や「学習材（もの）」の準備を心がける。また、教師も子どももふり返るための手助けとして学習の足跡がわかるような校内掲示・教室掲示を心がける。

4 研究の計画

4月	研究の共通理解・研究日等の決定
8月1日	夏期研修会（内容は今後検討）
9月	公開研の構想・環境整備
10月	公開研単元決定・事前研・公開研資料完成・打合せ
11月	公開研（授業研 11/16（金））
12月	公開研ふり返り
1月	研究のまとめ（1年間の授業やくらしから見える子どもの育ち）
2月	授業研（冬の学習会）
3月	研究集録発行